

巻 頭 言

20年ぶりの東北開催 ——10年後の精神医学の道標となる学術総会を めざして——

矢部博興 日本精神神経学会理事、第116回日本精神神経学会学術総会会長
Hirooki Yabe

第116回日本精神神経学会学術総会を2020年6月18～20日の3日間にわたり仙台市の仙台国際センターおよび東北大学川内萩ホールで開催いたします。本学会学術総会の東北での開催は6回目となりますが、1929年に第28回総会（仙台）を丸井清泰先生、1953年に第50回総会（仙台）を石橋俊実先生、1964年に第61回総会（盛岡）を三浦信之先生、1986年に第82回総会（盛岡）を切替辰哉先生、そして最後に2000年に第96回総会（仙台）を佐藤光源先生が開催されてから実に20年ぶりとなります。

本学術総会のテーマは、「今日の精神医学の検証——10年後への道標として——（Critique on psychiatry today as a signpost for the next 10 years）」といたしました。臨床、教育、研究、そして災害医学・医療の各分野における精神医学の検証を行って将来への道標となる学術総会となることをめざします。2011年3月11日に発生した東日本大震災は、岩手、宮城、福島県の3県を中心に東北地方に地震・津波による甚大な被害をもたらしました。しかし、福島県における最大の災厄は、東京電力福島第一原子力発電所の事故であったといえます。原発事故後の住民に沈滞した心の傷は深く、心理社会的問題は継続し複雑化しています。事故直後には内閣府による居住制限のため12万人を超える住民が避難を余儀なくされ、県内外で長期的な避難生活を送ることとなりました。2015年に楢葉町、2017年には川俣町、浪江町、飯館村、富岡町の居住制限区域および避難指示解除準備区域が解除されましたが、今なお3万1千人を超える県外避難者がいます。これは、県外避難者が非常に少ない岩手県や宮城県の状況とはかなり異なります。また、精神科病床の大量喪失、大規模な住民避難や健康不安、風評被害と差別の多重苦によってメンタルヘルスの危機に陥った東北の精神医療は、日本の精神医療福祉の将来を占う試金石です。つまり、精神科救急医療、アウトリーチと地域精神医療、児童精神医療、触法精神障がい者の医療、身体合併症を伴う精神障がい者の医療確保、自殺予防、

アルコール依存症対策、認知症の医療福祉の充実、不足する精神科医療機関・精神科医の確保など、日本全体の精神医療の課題が切迫しているのが東北なのです。このような課題を抱える東北で本学会を開催することは大変意義があります。

一方、国は2011年に省令改正により「5疾病・5事業および在宅医療」として精神疾患と在宅医療を医療計画に加え、精神保健福祉法も改正しました。2020年はこれらの成果を評価する重要な年でもあります。また教育面では、起伏の末に新専門医制度の導入が2018年から始まり、現行の臨床研修制度と並んで2020年はその振り返りをすべき年です。さらに、学部教育も新カリキュラムが導入され、2020年はその成果が試されます。これは、精神医学の基幹学会としての本学会の重要な役割の1つです。研究面においては、2020年はNature誌が2010年の新年号巻頭言に「精神疾患のための10年」を発表してからちょうど10年目の総括の年にあたります。この10年で得られた精神疾患の解明につながる新しい知見や可能性のあるバイオマーカーについても本学会で議論する必要があります。昨今、精神医療の臨床の現場からは、確固としたバイオマーカーをもたないEBM精神医学の限界を問う声も少なくなく、世界と協調して歩んできた日本の精神医学を検証すべき時であります。以上のように、2020年は現行の精神医療・医学の検証と将来への変革が求められる重要な年であり、国全体もオリンピックの開催で賑わいます。

東北は自然に恵まれて風光明媚なところですが、トラウマティックな歴史の舞台でもあります。なかでも東日本大震災と福島第一原発事故の心理的負荷は人々の心に大きな影響を与えました。会員の皆様とともに、日本の精神医療・医学の未来にとっての道標となる学術総会をめざして参りたいと存じます。たくさんの皆様のご参加を心からお願い申し上げます。